

松井須磨子

長谷川時雨

青空文庫

大正八年一月五日の黄昏^{たそがれどき}時に私は郊外の家から牛込^{うしごめ}の奥へと来た。その一日二日の私の心には暗い垂衣^{たれぎぬ}がかかっていた。丁度黄昏^{たそがれどき}のわびしさの影のようにとぼとぼとした気持ちで体をはこんで来た、しきりに生^{せい}の刺^{とげ}とか悲哀の感興^{かんきよう}とでもいう思いがみちていた。まだ燈火^{あかり}もつけずに、牛込では、陋居^{ろうきよ}の主人をかこんでお仲間の少壮文人^{さんごにん}たちが、

「須磨子^{すまこ}が死にました」

と夕刊を差出した。私はあやうく倒れるところであつた。壁ぎわであつたので支^さえることが出来た。それに何よりもよかったのは夕暗^{ゆうやみ}が室^{へや}のなかにはびこっていたので、誰にも私の顔の色の動いたのは知れなかった。死ねるものは幸福だと思つていたまつただなかを、グンと押して他^{ほか}の人が通りぬけていつてしまったように、自分のすぐそばに死の門^{とびら}が扉^{とびら}をあけてたおりなので、私はなんの躊躇^{ちゆうちよ}もなく、

「よく死にましたね」

と答えてしまった。みんな慄然^{ふげん}として薄ぐらいなかに赤い火鉢の炭火を見詰めた。

「でも、ほんとに死ぬる人は幸福じゃありませんか？ お須磨さんだって、島村先生だから……」

すこし僣越^{せんえつ}な言いかたをしたようだと思ったので私はなかばで言いさした。私は須磨子の自殺の原因がなんだかきもしないうちから、きくまでもないもののように思っていた。

「彼女が芸術を愛していれば死ぬるものではないだろうに……死ななくったって済むかと思われますね。財産もあるのだというから外国へでも行けば好いに」

電気が点くと、そう言った人のあまり特長のない黒い顔を見ながら、この人は恋愛を解さないなと思った。一本気で我執のかなり強そうだったお須磨さんは、努力の人で、あの押きる力^{おし}は極端に激しく、生死のどっちかに片附けなければ堪忍^{がまん}できないに違いない。

「とにかくよく死んだ。是非はどうとも言えるが、死ぬものは後の褒貶^{あとうへん}なんぞ考える必要はないから」

と言うものもあった。死んだという知らせを電話で聞いて、昂奮^{こうふん}して外へは出て見たが何処へいっても腰が座^{すわ}らないといって、モゾモゾしている詩人もあった。けれど、みんな

理解を持っているので、芳川鎌子の事件の時なぞほど論じられなかった。

「島村さんの立派な人だったことが世間にもわかるだろう。須磨子にもはつきりと分つたでしょう」

そんなことが繰返えされた。全く彼女は、島村さんの大きい広い愛の胸に縋り、抱かれなくなつて追つていったのであらうと、私は私で、涙ぐましいほど彼女の心持ちをいじらしく思つていた。

連中が出ていつてしまつてからも私はトホンとして火鉢のそばにいた。生きている悩みを、彼女も思ひしつたのであらう。種々さまさまな、細かい煩うるささが彼女を取巻いたのを、正直でむきな心はむしろくしゃとして、共にありし日が恋しくて堪えられなくなつたのであらうと思うと、気がさもののばかりが知るわびしさと嘆きを思いやり、同情はやがて我心の上までかえつて来た。

抱月ほうげつ氏のおくやみにいったのも、月はかわれど今夜とおなじ時刻だと思ひながら、偶然におなじ紋附きの羽織を着て来たことなどを氣にして芸術倶楽部の門を這入はいつた。秋田氏に導かれて奥の住居の二階へといった。抱月氏のおりには芸術座の重立おもだつた人はみんな

明治座へ行っていたので、座員の一人が、

「松井が帰りましたら申伝えます」

と弔問を受けたが、いるべき人がいないので淋しかった。それがいま、突然の死に弔られる人となろうとは思ひながら案内された。

旧 臘きゆうろう

解散した脚本部の人た

ちの顔もみんな見えた。誰れもかれも落附かないで、空気が何処となく昂奮していた。

居間の前へくると杉戸がぴつたりと閉切しめきつてあった。室内では死デスマスク面をとっているの

であった。次の室にも多くの人がいた。手前の控室のようなところには紅蓮ぐれんどう洞氏がしき

りに気焰きえんをあげていた。杉戸が細目に中から開あけられて、お湯が入用だといったときに、

座員の一人は紫色の瀬戸ひきの薬罐やかんをさげていった。洗面器が入用だというと身近く使わ

れていたらしい女中が「先生のときに一つつかってしまつて、一つしかないのだけれど」

と、まごまごしていると、室のなかから水をなみなみと入れた洗面器をもちだして来てあ

けにいった。

（あの人の死骸しかいはこの杉戸一枚の向うにある）

引締ひぢつた心持ちで佇たたずんでいると、頭の底が冷たくなって血が下へばかりゆくような気が

した。何やら面倒な問題があつたと噂うわさされた楠くすやま山氏が側へ来たが、

「死ななくつてもよかつたろうと思うのですが……」といって、「これから郊外へかえるのは大変ですね」と話題をそらした。

洗面器のことで呟つぶやいていた年増としまの女中は杉戸の外にしゃがんでいたが、秋田さんが氣附いたように、

「何か棺のなかへ入れてやるものでもないですか？　好きなものであつたとか、大事にしていたものであつたとか……忘れてしまふといけないから」

というのに、ろくに考えもせずに、

「お浴衣ゆかたが着せてありますから、あの上へ経きようかたびらを着せればよいでございましょう。

時計だの指輪だのというものは、かえつてとつてあげたほうがよろしいでしょうよ。ああしたお方でしたから。島村先生の時にはお好きだからって、あの方が林檎りんごとバナナをお入れになりました。ですから蜜柑みかんのすこしも入れてあげたらよろしゅうござりましょう」

と無むぞうさな事を言つていた。

素朴なのは彼女の平常であつたかも知れないが、名を残した一代の女優の、しかも若く、美しく、噂の高かつたロマンスの主であり、恋愛に生きた日を慕つて、逝いつた人を葬むむるのに、そんな無作法なことつてないと腹はら立だしかつた。こんな女に相談をかけるとはと、

秋田氏をさえ怨めしく思った。死んだ女は詩のない人であつたが、その最後は美しく化粧して去つたというではないか、私は彼女に、第一の晴着が着せたかつた。思出のあるならば婚礼の夜の衣裳といったようなものを、そしてあるかぎりの花で彼女の柩のすきまは埋めたかつた。諸方から来る花環は前へ飾るよりも、崩して彼女の亡骸に振りかけた方がよいに、とも思った。

（親身でもないに立入つたことは言われない）

そう思ったときに、生々としていて、なんの苦悶のあとともめない死顔が目に見えるようであつた。暗い寒い静かな明方に、誰れも気づかぬとき、床の間の寒牡丹が崩れ散つたような彼女の死の瞬間が想像され、死顔を見るに堪えなくなつて暇を告げた。

秋田さんは玄関まで連立つて来ながら、

「あすこへね、あすこから卓と椅子を持つていつて、赤い紐で縊れたのです。ちゃんと椅子を蹴つたのですね息をのんだと見えて口を閉じていたし、それは綺麗な珍らしい死方だそうです」

こういうおりに送り出されるのは忌むのが風習ではあるけれど、話しながら送りだされてしまった。

私は道を歩きながら彼女に逢ったおりの印象を思いうかべていた。舞台外では幾度と逢ったのではないが、いつでもあの人はキョトンとした鳩はとのような目附きで私の顔を眺めていた。文芸協会の生徒の時分もそうであつたし、芸術座の女王クイーン、女優界の第一人者となつてからもそうであつた。貞奴さだやつこが引退興行のときおなじように招かれて落ち合つたおり、野暮やぼなおつくりではあるが立派な衣裳になつた彼女は飾りけのないよい夫人おくさんであつた。田村俊子たむらとしこさんが、

「何故なぜ挨拶あいさつしないのよ。だまつて顔ばかり見ていてき。一体知っているの知らないの」
 こう言つても、やつぱり丸い眼をして——舞台で見るのとはまるで違う、生彩のない無邪気な眼をむけて、だまつて、度外どはずれた時分にちよいと首を傾かしげて挨拶とお詫わびとをかねたこつくりをした。それが私には大変よい感じを与えたのであつた。可愛いところのある女だと思つた。

自分のことと須磨子の事件とがひとつになつて、新聞を見ても目の裏が火のように熱く痛くなつた。彼女が臨終七時間前に撮うつたという「カルメン」の写真は、彼女の扮ふん装そのうちでもうつくしい方であるが、心なしか見る目に寂しげな影が濃く出ている。ど

うした事かそのおりばかりは、写真を撮るのを嫌がって泣いたのを、例の我儘だとばかり思つて、誰れも死ぬ覺悟をしている人だとは知らないで、「そんな事をいわないで」といつて無理に撮らせてもらつたのだというが、死の前に写した、珍らしい形見の写真になつてしまつた。きつと彼女の目のなかは、焼けるように痛かつたであらう。抱月氏の逝去された翌日、須磨子は明治座の「緑の朝」の狂女になつていて、舞台上で慟哭したときの写真も凄美だつたが、死の幾時間かまゐにこんなに落附いた静美をあらわしているのは、勇者でなければ出来得ない。私は須磨子を生活の勇者だとおもう。

——誰れの手からも離れてゆくこの女の行途を祝福して盛んにしてやりたいから、という旧芸術座脚本部から頼まれた須磨子のための連中は、七草の日に催されるはずであつたけれどももう見ることは出来ない。芝居の大入りつづきのうちに一座の女王が心静かに縊れて死んでしまうということは、誰れにも予想されない思いがけない出来ごとであつて、幾年の後、幾百年かの後には美しい美しい伝奇として語りつたえられることであらう。

その最後の夜、須磨子としては珍らしく白を取り違えたり、忘れてしまつたりして、対手をまごつかせたというが、そんなことは今まで決してない事であつた。舌がもつれて言にくい様子を不思議がつたものもあつた。カルメンの扮装をしたままで廊下にこごみが

ちに佇^{たつ}んでいたというのは、凝^{じつ}としては部屋にいらなかったのでもあったろう。そしてホセに刺殺^{せつ}されるところは真にせまっていたが、なんとなく悦んで殺されるようで、役柄とは違っていたという。

内部のある人のいうには、一体に島村先生に別れてからは、芝居のいきが弱くなって、どうもいままでの役柄にあわなくなっていた。ことに今度のカルメンなどは、彼女に最も適^{じふ}した漂泊^{ジプシイ}女の女であり、鼻つぱりの大層強い性格で、適^{はまりやく}役でなければならぬのに、どうもいきが弱かったと言った。

彼女は死ぬ幾日かまえに、

「あなたはもつと真面目^{まじめ}に人生を考えなければいけませんよ」
といわれたときに、

「今にほんとに真面目になつて見せますよ」
と答えた。もうその時分から死ぬことについて考えていたのかもしれない。カルメンの唄^{うた}う調子が低くつて音楽にあわなかったというが、その心地をぼつちりも洩らすような友人のなかったのが哀れでならない。

後からきけば種々^{いろいろ}と、平常^{ふだん}に変わったことが多くあったのである。抱月氏でなくとも、彼

女を愛する肉親か、女友達があつたならその素振りを見逃がさなかつたであらう。何か異状のあることと気をつけていたに違いない。彼女は写真を撮るまえに泣いたばかりでなく、ひとり淋しく廊下に佇んで床を見詰めていたばかりでなく、その日は口数も多くきかなかつた。夕食に樂屋一同へ天井の使いものがあつたが、須磨子の好きな物なのにほしくないからとて手をつけなかつた。帰宅してからも食事をとらなかつた。夜更けてかえると冷るので牛肉を半斤ばかり煮て食べるのが仕来りになつていた。それさえ口にしなかつた。十二時すぎになると、抱月氏を祭つた仏壇のまえでひそひそと泣いていたが、それは抱月氏の永眠後毎日のことで、遺書は四時ごろに認ためられた。

最後の日の朝、洗面所を見詰めて物思いにふけていたというが、生前抱月氏は手細工の好きな人で、一、二枚の板ぎれをもてば何かしら大工仕事をはじめて得意でいた。洗面台もそうしたお得意の細工であつたのである。毎朝々々顔を洗うたびに凝と見詰めているが、そのおりも何時までも何時までも立つたままなので風邪をひかせてはいけないと、女中が気をつけに側へいったのに驚いて、歯を磨きだした。そしてその翌朝は、そのとなりの、新らしく建増した物置きへ椅子や卓を運んでいったのであつた。つい隣りの台所では下女が焚きつけはじめていたということである。坪内先生と、伊原青々園氏と、親類

二名へあてた遺書四通を書きおわつたのは曉近くであつたであらう。階下の事務室に寝ているものを起して六時になつたら名宛あてのところへ持つてゆけと言附けたあとで、彼女は恩師であり恋人であつた故人のあとを追う終焉しゅうえんの旅立ちの仕度にかかつた。

彼女は美しく化粧した。彼女は大島の晴着に着代え、紋附きの羽織をかさね、水色縹しゆち珍の丸帯をしめ、時計もかけ、指輪も穿はめて、すっかり外出姿そとですがたになつて最後の場へ立つた。緋の絹縮きぬちぢみの腰紐ひもはなめらかに、するすると、すぐと結ばれるのを彼女はよく知つていたものと見える。

あの人は變つている、お連合つれあひと口論したら、飯櫃めしびつを投りだして飯粒だらけになつていたつて——家がお堀ほりばたの土手下で、土手へあがつてはいけないという制札があるのに、わざと巡査のくる時分に駈上かけつたりするつて。ということ、まだ文芸協会の生徒の時分に聞いた。そのうち舞踊劇の試演があつて、坪内先生のいらつしやる樂屋にお邪魔していると、ドンドンドンという音がして近くで大きな声がした。何だろうと思つていると、

「正子まさこさんの白せりふのおさらいだ」

と説明するように傍の人が言つたが、四辺あたりにかまわぬ大きな声は、悪口をいえば癡癡病ふうてん

院へでもいったように吃驚^{びつくり}させられた。今度の騒ぎで諸氏の感想を種々聴くことが出来たが、同期に女優になり、いまは「近代劇協会」を主宰している良人^{おつと}の上^{かみ}山^{やま}草^{そう}人^{じん}氏と御夫婦しておなじ協会の生徒であつた山川^{やまかわ}浦^{うら}路^ろ氏の談話によると、生徒時代から須磨子は努力の化身のようで、手当り次第に台本を持ってきて大きな声で白^{せりふ}をいつたり朗読したりし、対手^{あいて}があろうがなからうがとんちやくなく、すこしの暇もなく踊ったりして、火鉢にあたつてゐる男生の羽織の紐をひっぱつては舞台へ引出して対手をさせる。その人が勞^{つか}れてしまうとまた他の人を引っぱりだしてやらせる。皆が嫌^{きら}がると終^{しま}いには一人で、オフイリヤでもハムレットでも墓掘りでもやつてしまう。自分の役でない白でも狂言全体のを覚えこむという狂的な熱心さであつたということである。

生徒時代には身なりにとんちやくなく、高等女学校や早稲^{わせだ}田^だ大学出の人たちの間へはさまり、新時代の高級女優となつて売出そうという人が、前垂^{まえだ}れ^だがけの下から八百屋で買つて来た牛蒡^{ごぼう}と人參^{にんじん}を出してテーブルの上へのせておいたまま「これはお菜^{かす}です」とその野菜をいじりながら雑誌を一生懸命に読出したということや、他の生徒たちと一所に帰る道で煮豆やへ寄つて、僅^{わず}かばかりの買ものを竹の皮に包ませ前掛けの下にかくし「これで明日のお菜もある」といった無^なぞ^とうさや、納^な豆^{とう}にお醬^{しょう}油^ゆをかけないで食べると声がよ

くなるといわれると、毎日毎日そればかりを食べて、二階借りをしていたので台所がわり
 にしていた物干しには、納豆のからの苞苴つとが稲村いなむらのようなかたちにつみあげられ、やが
 てそれが焚附たきつけにもちいられたということや、卒業間近くなつて朝から夜まで通して練習
 のあつたおりなど、みんながそれぞれのお弁当をとるのに、袂たもとのなかから煙の出る鯛焼たいやき
 を出してさつさと食べてしまうと、勝手にさきへ一人で稽古けいこをはじめたということなど、
 そうもあつたろうとほほえまれる逸話をいろいろと聞いている。

「須磨子は地方へゆくと、座員のお弁当まで受負うのですとき。一本十三銭五厘だつて。
 だつて、たしかな人がいうのですもの嘘ではない。それでね大奮発おおふんぱつで手製なのですつて、
 お手伝いをさせられるものは大弱りだわ。みんながよく食べるかつて？ ううん、不味まずく
 つていやだというものが多いから大儲おもうかりなの。だつて自弁は御勝手で、つまり芸術座
 から賄費まかない用が出るのだから。手つとりばやく芸術座の儲けの幾分が、女優須磨子の利益
 の方へ加わるだけの事だから。そしてね、おかずは何だと思ふの、毎日毎日油揚げの煮附
 け」

いまは外国へいった友達がはなした。私たちは「まさか！」といつて笑つていたが、あ
 る夜は、芸術倶楽部の居間を訪れての帰りがけに立寄つた人が、

「大変先生も機嫌がよかった。いま一杯やるところだからと進められたが、お須磨さんが土瓶どびんをもっているからなんだと思つたら、土瓶でお爛かんをして 献酬けんしゅうしているところだつた」

細こまかしいことには無頓着むとんちゃくな須磨子の話しをした。極く最近、地方興行が当つて、しかもこの次からは松竹の手で興行をするようになるので、万事そうした方の心配がなくなるというような、芸術座の前途が明るくなった話しのつづきに、

「こんどの地方興行が当つたので、島村さんもいくらか楽になったので、座の会計の都合が悪かつたときに、電話を担保にしてお須磨さんから借りた金を、返そうといったらば、彼女がいうのには、あの時分より電話の価ねがあがつているから、あれだけでは嫌だというので、それでは止めようとそのままになつてしまつた」

と言つた。それこそ私は根もないことだろうと打ち消すと、
「ほんとなのですよ。先生は貧乏——つまり芸術座は貧乏でも、お須磨さんは財産をつくっているのです。かなりあるのです」

といいはつた。奮闘克己あてはまという文字に当嵌あてはまつた彼女だ。

二

傲慢^{ごうまん}なほど一直線であつた彼女の熱情——あの人の生き力は、前にあるものを押破つて、バリバリとやってゆく、冷静な学者の魂に生^{なま}々しい熱い血潮をそそぎかけ、冷凍^{こお}つていた五臓に若々しい血を湧返^{わきか}えらせ、絶^{たえ}ず傍^{かたわ}らから烈しい火を燃しつけた。彼女は掌握^{つかみ}しめてしまわなければ安心することの出来ない人であつた。そうするには見^み得^えも嘲^{ちやうし}笑^{しょう}も意にしなかつた。そのためには抱月氏がどんな困難な立場であらうとかまわなかつた。彼女の性質は燃えさかる火である、むかつ氣である。彼女に逢つたときにうけた顔の印象には、すこしの複雑さも深みも見られなかつた。彼女は文芸協会演芸研究所の生徒であつた時分に、山川浦路さんに英文の書物のくちやくちやになつたのを見せて、

「英語を教わつて癩^{かんしやく}癩^{かんしやく}がおこつたから、本を投げつけちゃつた。出来ないから教えてもらうのに、良人がいくらおしえても解らないなんて言うから」

といったそうだ。抱月氏と同棲^{どうせい}してからも激しい争闘がおりおりあつたとかいうことである。向いあつてるときはきつと何か言いあいになる。頬^ほつぺたへ平打^{ひらうち}ちがゆくと負けていないで手をあげる。そうしたことはちよつと聴くと仲が悪いようにきこえるが、喧嘩^{けんか}

もしないような家庭が平和で幸福があるとばかりはいえない。激しい争闘のあとに、理解と、熱い抱擁とが待っているともいえる。

「奥さんがもすこしなんだつたら——坪内先生の奥様のように優しく、なにかのことを気をつけてくださるようだといいのだけれど……」

こういった須磨子は自分勝手だったかも知れない。そうはいっても須磨子自身も、先方の思いやりなどはちつとも出来ないたちで、噂だけか、それとも誠のことか、ある時抱月氏の令嬢たちに手紙をやつて、これから貴女あなたがたは私をお母さんと思わなければなるまい、といったとか、自信も勇氣も、過ぎると野猪いのししのむこうみずになるが、彼女が脱線したのには一本氣な無邪氣さもある。かつて私はあの人の芸が、精力エネルギッシュ的で力強いのを畏敬いけいしたが、粗野なのに困るという気持ちもした。感情も荒つぽいので、どうしてもあの人とならんで、も一人、繊細な感情の持主であり、音楽的波動で人にせまる、詩ポエティック的な女優ポエティックがなくてはならないと思つていた。陶冶とうやされないあの駄々だだっ子は、あの我儘が近代人だといえはそうとも言われようが、氣高い姿体と、ロマンチックな風致をよろこぶ女にも、近代人の特色を持った女がないとは言われない。

ひたぶるに突進んでいつて、突きあたる壁のあつたのをはじめて発見したのだ。彼女が

勢力にまかせて押退けたおりには、奥深くへと自然に開けていった壁が——何の手ごたえもない幕のように見えた壁が、巖壁がんぺきのように巍然ぎぜんと聳そびえたつていて、弾はじき飛ばした。彼女ははじめて目覚めて、鉄のように堅く冷たい重い壁を織せん手をのべて打叩うちたたいて見た。そしてその反響は冷然と響きわたり、勝手にしろと吼ほえた。そのおりには、もう彼女の住む広い胸はなかった。底知れなかった愛人の情をしみじみとさとり知ったおり、そこに偉大な人格を偲しのばなければならなかった。

傲慢な舞台、中ごろが一番激しかった。ことに幕切れなどは、傍若無人ぼうじやくぶじんという難をまぬがれないおりもあつて、見ていてさえハラハラしたものである。女王に隷属するのは当り前ではないかといった態度が歴然としていた。最後までそれで通して行こうとしたのが、何か気が阻はばんだのだ。一本気だけに絶望の底は深かった。

彼女が大層他人ひと当りがよくなったという事を聴いたのもかなり前のことで、抱月氏のお通夜つやの晩に、坂本紅蓮洞くれんどうの背中を、立ったまま膝ひざで突つくものがある。冬のはじめの、夜中のこととて、紅蓮さんは暖まるものを飲んでいた一杯気嫌で、

「誰だ」

と強くいつて振りむいて見ると、須磨子がうつむき加減に見おろしていて、

「どいてくれない？」

その座にかわっていたいのだという。末席の後の方だったので、やっぱり棺の側にいた方がよからうという、

「でも、あの女が私の方ばかりじろじろ見ているのだもの」

と島村未亡人の方を指差したということである。我儘ものだが、どこかにしおらしい、自分から避ける心持ちも持っていたのである。

でも彼女は、島村氏の令嬢たちが芸術座へ生計費せいけいひを受取りに来たとき優しくは扱わなかった。門前払い同様にしたといわれ、ずっと前の家では格子戸こうしどを閉たてきり、水をぶっかけようとしたこともあるという。それは何かしら心の安定を失っていたときと見た方がよからう。でなければ、いかに仲に立った人が適當の処分をし、よく幹旋あつせんしたからとて、抱月氏の死後、彼女が未亡人や遺孤いこに対して七千円を分割し、買入れた墓地まで、心よく島村家の人たちに渡してしまうはずはない。

「私もこの墓地へはいるのだから」

彼女は墓地の相談のときにこういつていたそうである。島村家へ渡したといっても、自分が買って、大切な先生の遺骨ほねを埋めたところゆえ、自分のものだという心持ちでいたの

であろう。それでも不安心なところもあったかして、その隣地の背面の空地を買っておこうと呟つぶやいていた。けれど誰れがそのおり須磨子の心のどん底に、死ぬことを考えてもいたと思いつく道理はなかった。

抱月氏は須磨子のために全部を奪われてしまっているものだときえ思われたが、ある興行師は須磨子にむかつて、

「も一儲ひともけするのなら、抱月さんと別れて見せることだ。人氣が湧わけば金もはいる」

といったとやら。金、金、金……利殖よりほか楽しみのないもののようにいわれた彼女が、女優生活の十年に残しえた三万円を捨ててかえり見ず、縊くびれ死んでしまつて、そういう人たちに啞然あぜんとさせたのは痛快なことではないか。

「死んだときいたら、嫌だつたことはさらりと消えてしまつて、ほんとに好い感情を持つことが出来た。何だかこう、昨夕ゆうべまで濁ぬつていた沼おの面もが、今朝けさ起きて見ると、すっかりと澄みわたつているので、夢ではないかと思うような気がする。僕はそんな心持ちがするといつたら、N氏もほんとにそうだ、私もそういう気持ちがしたと言つた」

と抱月氏とも須磨子とも交りのふかかったA氏が話された。そのおりに言葉のつづきで、
「あの人は死によつて、あの人の生活を清浄なものにした」

「あの人のぐらい自然な感じのする死はない」

「僕はもうすこしあの人を親切にしてやればよかった」

讚美と感激ののち、沈黙がつづいたはてに、突然ある人が、

「しかし、松井君は随分憎らしかったね」

と言出すと、その一言^{ひとこと}でその座の沈黙が破れて、その言葉に批判があたえられずに、

「そうだ。やっぱり憎らしい人だったね」

と前の讚美とおなじように連発された。その二つの、まるで異^{ちが}った意味の言葉は、一致し
そうもない事でありながら、松井須磨子の場合には不思議に一致して、

（立派な死^{しにかた}方^{かた}をした、しかし随分憎らしい記憶を^{ほと}おいて^{いだ}ってくれた人だ）

これが須磨子を知っている人の殆^{ほと}んどが抱^{いだ}いた感じではなかったろうか、この偶然の言
葉が須磨子の全生涯を批評しているようだといわれた。

あの人は怒っているか笑っているか、どっちかに片附いている人だったが、泣くという
ことがふえて、死ぬ前などは、怒っているか、笑っているか、泣いているかした。

「先生と私との間は仕事と恋愛が一緒になったから、あんなに強かったのよ」
といい、

「私がほんとうに家庭生活というものを知ったのはこの二、三年のことですよ、先生もほんとに愉快そうですわ」

といったりした彼女が、泣虫になったのはあたり前である。むしろ笑いが残っていたのが怪しいほどだ。

恋人と緑の朝の土になり

と川柳久良岐せんりゆうくらぎ氏は弔した。「緑の朝」は伊太利イタリーの劇作者ダヌンチオの作で「秋夕夢」と

姉妹篇であるのを、小山内薫おさないかおる氏が訳されたものである。どうしたことからこの「緑の朝」

には種々の出来ごとがついて廻った。最初去年の夏、帝劇で市村座連の出しものであった

とき、劇評家と、狂主人公に扮した尾上菊五郎おのえとの間に、何か言葉のゆきちがいから面白

くないことが出来て、菊五郎の芝居は見るの見ぬのとの紛紜いざこざがあった。小山内氏は訳者

という関係ばかりではなく、市村座の演劇顧問という位置からしても、舞台上の酷評には

昂奮こうふんしないわけにはゆかなかった。それから間もなくその舞台装置の責任者であった、

洋画家 小糸源太郎こいとげんたろう氏が、どうしたことか文展へ出品した額面を、朝早くに会場へまぎれ

こんで、自分の手で破棄したことにつき問題が持上り、小糸氏は将来絵筆をとらぬとかい

うような事が伝えられた。口さがない楽屋雀がくやすずめはよい事は言わないで、何かあると、緑の

朝ですかねというような反語を用いた。その評判を逆転しようとしたのが松竹会社の策略であった。松竹は芸術座を買込み約束が成立すると、その魁さきがけに明治座へ須磨子を招き、少壮気鋭の旧派の猿之助えんのすけや寿美蔵すみぞうや延若えんじやくたちと一座をさせ、かつてとかく物議ぶつぎの種たねになった脚本をならべて開場した。

二番目には寿美蔵延若に、谷崎潤一郎作の小説の「お艶殺しつや」をさせることになった。これは芸術座が新富座しんとみぞで失敗した狂言である。お艶を須磨子が、新助は沢田正次郎さわだしろうじろうが演じて不評で、その後直に沢田が退座してしまったのをさせ、その代りに中幕なかまくへ「崇たかられるね」というような代名詞につかわれている「緑の朝」を須磨子に猿之助が附合つきあうことになった、無論菊五郎にはめ、男にした主人公を原作通り女にして須磨子の役であった。稽古けいこの時分に須磨子は流行の世界感冒せかいかけにかかっていた。丁度私が激しいのかかかって寝付いているとA氏が見舞に來られて、私が食事のまるでいけないのを心配して、島村さんも須磨子も寝ているがお粥かゆが食べられるが、初日が目の前なので二人とも気が気でなさそうだとも言っていた。二人とも日常非常ひじょうに壮健じようぶなので——病わづらつても須磨子が頑がん健けんだと、驚いているといっているという、看病人の抱月氏の方がはかばかしくないようだった。どうにか芝居の稽古までに癒なほった彼女は、恩師みとを看る暇もなく稽古場へ行った。

十一月四日の寒い雨の日であつた、舞台稽古にゆく俳優たちに、ことに彼女には細かい注意をあたえて出してやつたあとで抱月氏は書生を呼んで、

「私は危篤らしいから、誰が来ても会わない」

と面会謝絶を言いわたした。出してやるものには、すこしもそうした懸念をかけなかったが、病気の重い予感があつたのだつた。慎しみ深い人のこととて苦しみは洩さなかつた。かえつて、すこし心持ちがよいからと、かわや廁にも人に援けられていった。だが梯子段を下りるには下りたが、登るのはよほどの苦痛で咳入り、それから横になつて間もなく他界の人となつてしまった。

不運にも、その日の「緑の朝」の舞台稽古は最後に廻された。心がかりの時間を、空しく他の稽古の明くのを待つていた芸術座の座員たちは、漸く翌日の午前二時という夜中に楽屋で扮装を解いていると、

「先生が危篤ということです」

と伝えられた。取るものも取りあえず駈戻つたが、須磨子は自用の車で、他の者は自動車だったので、一足さきへついたものは須磨子の帰るのを待つべく余儀なくされていると、彼女はすすりなきながら二階へ上つていったが、忽ちたまぎる泣声なきこえたので、みん

な駈^{かけあが}上った。

彼女は死骸^{しかい}を抱いたり、撫^なでさすったり、その廻りをうろうろ廻ったりして慟^{どうこく}哭しつづけ、

「なぜ死んだのです、なぜ死んだのです。あれほど死ぬときは一緒だといったのに」と責^{せめ}るように言つて、A氏の手を振りまわして、

「どうしよう、どうしよう」

と叫び、狂うばかりであつた。どうしても、も一度注射をしてくれといつてきかないので、医者は会得^{えとく}のゆくように説明のかぎりをつくした。

「あんまりです、あんまりです。どうにかありませんか？　どうかしてください。これではあんまり残酷です」

狂い泣きをつづけた。

三

神戸に住む擁護^{パトロン}者のある貴婦人に須磨子がおくつた手紙に、

私は何度手紙を書きかけたか知れませんが、あたまで変になっていて、しどろもどろの事ばかりしか書けません。一度お目にかかって有^{あり}ったけの涙をみんな出さして頂きたいようです。

奥様、役者ほどみじめな者は御座いません。共^{とも}稼^{かせ}ぎほどみじめな者はございません。私は泣いてはおられずあとの仕事をつづけて行かなくてはなりません。今の芝居のすみ次第飛んでいつて泣かして頂きたいのですけれども、仕事の都合でどうなりますやら……

奥様、私の光りは消えました。ともし火は消えました。私はいま暗黒の中をたどっています。奥様さつして下さいませ。

「私は臆病なため死^し遅^{におく}れてしまいました。でも今の内に死んだら、先生と一緒に埋めてくれましょうね」

笑いながら、戯^{じょうだん}言^きにまぎらしてこう言ったのを他の者も軽くきいていたが、臆病^{きおく}と言ったのは本当の気臆^{きおく}れをさして言ったのではなくって、死にはぐれてはならない臆病^{きおく}だつたのだ。適当の手段を得ずに、浅間^{いきはし}しく生^{いき}恥^{はじ}か死^し恥^{はじ}をのこすことについての臆病^{きおく}だ

ったのだ。一番容易に死ぬことが出来て、やりそくないのない縊死をとげるまで、臆病と自分でもいうほど、死の手段を選んでいたのだ。

座の人たちが思いあたることは、この春の興行に、「ヘッダガブラア」が候補になったところ、彼女はどうしても嫌だと言張った。ヘッダのようなあんな烈しい性格のものばかりやるのは嫌だといってきたかなかった。その時の反対のしかたが異状だったので、脚本部の人たちも驚いていたのだが、いま思えば自殺の決行について絶えぬ闘争があつたのではなかつたかと言っている。ヘッダは最後にピストルで自殺する役である。それかあらぬか、それよりもすこし前に彼女はピストルを探して、弾丸^{たま}だけ探しだして、

「先生のピストルは何処へやつちやつたのだろう。いくら探しても見つからない。私が死にやしないかと思つて誰れか隠したのよ」
と呟^{つぶ}やいていたそうだ。

彼女に近い人のなかには泣かれ役という言葉があつた。青い布をかけた卓^{テーブル}の上に、大^{おお}形の鏡^たが^やおいてある室^{へや}が彼女の泣き室なのであつた。彼女は孤独でいる時は、その鏡のなかへ具合よく写ってくる壁^か上^{じやう}にかけた故人の写真を見ては泣いている。人^{ひと}がはいってゆけば、その人を対^{あいて}手^てにして尽^{つき}ることなく、綿^{めん}々^{めん}と語り、悲嘆にくれるので、慰めようも

なくて、捕虜になるのは禁物だと敬遠しあったほどだった。

かつ子にわか子という二人の養女は、まだやつと十二、三位で二人とも郷里くの親戚しんせきから来ている。

も一人いつぞや「人形の家」のノラを演じたときに、幼ない末子を勤めた女の子があった。あれは松井の子だったのではないかしら、あんまりよく似ているというようなことを、今度その少女むすめも葬式に来たときに内部の人は言った。しかしその少女のことは遺書にはなかった。二人の養女にもよい具合にしてやってくれと書いてあっただけである。かつ子といった方が相続者になったが、須磨子の母親のおいしという、七十の老女が後見人になり、縁類の某海軍中將がその管理人になった。そして彼女の一七日がすむと、雪深い故郷の信州へと帰っていった。残された建物——旧芸術倶楽部——故人なきひとたち二人の住んでいた記念の建物はどうなるのやら、そのまま帰ってしまった。

死デスマスク面は、彼女の生はえぎわ際の毛をすこしつけたままで巧妙に出来上ったそうで、生いきているときより可愛らしい顔だといわれた。

可愛らしい顔といえば、彼女の愛あい敬いきようのある話をきいたことがある。彼女はあおり某氏をたずねて、女優になりたいが鼻が低いからとしきりに気にしていた。そこで某氏は

パラフィンを注射した俳優に^{しりあい}知合のある事をはなして、そんな例もあるから心配するにも及ぶまいというと、彼女はその俳優の鼻が見せてもらいたいといいだしたので連れてゆくと、やっと安心してその後注射した。

鼻の問題ではも一つ面白い^{エピソード}挿話がある。佐藤（田村）俊子さんが、文芸協会の女優になろうとしたことがある。女史は充分に舞台を知っているうえに、遠くない前に^{ほんごう}本郷座で「波」というのを^や演って、非常な賞讃を得た記憶が新しかったから、気まぐれではなかったのにどうしたことから中止してしまった。ある日そのことを言出して、^{うわさ}噂は嘘だったのか本当だったのかと聞くと、

「嘘のことはない。やろうと思ったから行っただけで中止^{やめ}にしてしまったの。だって、須磨子の鼻を見ていたら——鼻の低いものが寄合^あったってしようがないじゃないの」

あの女史はポンポンと言ってしまったけれど、口のさきと心の底と、感じたものとおなじであったかどうかはわからない。感覚の鋭い女史が、激しい気性の須磨子と上になることも下になることも出来にくいと、見てとったと思うのは推測にすぎるかもしれないが、低い鼻という愛敬にかたづけしてしまった俊子女史の^{ウィット}機智もおもしろい。いま^{アメリカ}米国の^パ晩香波^{シンクーパー}に新しい生涯を開拓しようとして渡航した女史のもとに、彼女の^ふ計がもたらされた

ならばどんな感慨にうたれるであろう。

須磨子の年老^とった母親は他人が悔みをいつたときに、

「どうせ死神につかれていのですから、今度死なくなつたつて、何処かで死んだでしょうから」

と諦^{あき}めよく言切つたそうである。

彼女の故郷は？　そうした母親の懐^{ふところ}！

彼女が故郷への初興行は、たしかズウデルマン

の「故郷」のマグダであつたかと思う。そのおりの名声はすさまじいもので、県の選出代議士某氏は、信州から出た傑物は佐久間象山^{さくましやうざん}に松井須磨子だとも脱線した。けれどそ

の須磨子の幼時は、故郷の山河は人情の冷たいものだという観念を印象させたに過ぎなかつたのだ。

長野県埴科郡松代^{はにしなごおりまつしろざい}在、

清野村^{きよのむら}

が彼女の生れた土地^{ところ}で、先祖は信州上田の城主真^ま

田家の家臣、彼女の亡父も維新のおりまで仕官していた小林藤太という士族である。芸術^{ぎじゆつ}

倶楽部の一室に、九曜の星の定紋のついた陣笠^{じんがし}が置いてあつた。幕府の倒壊と共に主と禄^{ろく}に離れた亡父も江戸に出て町人になつたが、馴^なれぬ士族の商法に財産も空しくして故山に帰^かえつた。

信州の清野村に小林正子の彼女が生れたのは、明治十九年の十二月で八人の兄と姉とを持った末子であつた。六歳むっつのときに親戚にあたる上田市の長谷川家へ養女に貰われていつた。小学校時代から勝気で、男の兄こに鎌を振りあげられて頭に傷を残している。十六歳の時になつて不幸は萌きざしはじめた。養父の病死に一家は解散し、誠の母親よりも慈愛に富んでいた養母とも離れることになつた。実家に引き取られ、その年の秋には、実父にも別れた。僅わずかの間に二人の父を失つた彼女は、草深い片田舎かたいなかに埋もれている気はなかつた。姉を頼りにして上京したのが、明治卅五年の四月、故郷ふるさとの雪の山々にも霞かすみたなびきそめ、都は春たけなわのころ、彼女も妙齡十七のおりからであつた。

彼女が頼みにして来た姉の家は麻布飯倉あさぶいいくらの風月堂という菓子舗かしやであつた。義兄の深切で嫁とつぐまでをその家でおくることになつたが、姉夫婦は鄙ひな少女おとめの正子を都の娘に仕立したててことを早速にとりかかり、気の強い彼女を、温雅な娘にして、世間並みに通用するように、戸板裁縫女学校を選えらまれた。

彼女が後に文芸協会の生徒になつて、暫時ひととき独身ひとりみでいたとき、乏しいながらも二階借りをして暮してゆけたのは一週に幾時間か、よその学校へ裁縫を教えにいつて、すこしばかりでもお金をとる事が出来たからで、その時裁縫女学校へ通つたという事はかの女じよの生涯

にとつて無益なものではなかつた。

都の水で洗いあげられた彼女は風月堂の看板になつた。——彼女は美しい、いや美人ではないということが時々持ちだされるが舞台ではかなり美しかった。厳密にいつたなら美人ではなかつたかも知れないが、野性な魅力が非常にある型だ。

正子が店に座るとお菓子が好く売れるという近所の評判は若い彼女に油をかけるようなものであつた。縁談の口も多くあつたが断るようになってうちに、話がまとまつて彼女は嫁いだ。十七歳の十二月はじめに上総の木更津の鳥飼といふところの料理兼旅館の若主人の妻となつた。

彼女はどこまでも優しい新妻であり、普通の女らしい細君であつたが、信州の山里から出て来たのは、こんな片田舎の料理店の細君として納まつてしまふ約束であつたのであろうかと思わぬわけにはゆかなかつた。それに彼女の故郷の風習と、木更津あたりの料理店の女将である姑の仕来りとは、ものみながつくりとゆかなかつたその上に、若主人は放蕩で、須磨子は悪い病氣になつたのを、肺病だろふといふことにして離縁された。

……私は思う。勝気な彼女の反撥心は、この忘れかねる、人間のさいなみにあつて、弥更に、世を経るには負じ魂を確固と持たなければならぬと思ひしめたであらうと

嫁入つてたつた一月、弱まりきつた彼女はまた飯倉の姉の家にかえつてきた。健康が恢復して来ると、五年の星霜は、彼女には何かしなければならぬという欲求が起つて来た。

正子が松井須磨子となる第一歩は、徐々に展開されるようになった。彼女に結婚を申込んだ人に前沢誠助という青年があつた。高等師範に学んでいたが、東京俳優学校の日本歴史教師を担任していた。俳優学校というのは、新派俳優の故参、藤沢浅次郎が設立したもので、そのころ米國哲学博士の荒川重秀氏も新劇団を起し、前沢はその方にも關係を持っていた。その青年の求婚は須磨子の方でも氣が進んだのであろう。前沢の乏しい学生生活に廿二歳の正子という華やかな色彩が加わつた。

堅氣の家に寄宿して、出京しても一度も芝居を見なかつた若い細君の耳へ、毎日毎日響いてくるのは、劇に新生面を開いてゆかなければならないと、論じあう若き人々の声ばかりであつた。新時代の要求は立派な女優であるというような事も響いた。良人の前沢は妻にもそれを解らせようとした。彼女も知らずしらずに動かされて女優修業をしようと思ひ立つた。前沢の關係のある俳優学校は女優を養成しなかつたので、坪内先生の文芸協会へ

はいることになった。

当時、文芸協会の女優生徒の標準は高かった。英文学の講義、英語の素読というような科目もあった。彼女は試験委員の一人であつた島村氏の前へはじめて立つたおり、島村氏はじめ他の委員も彼女の強壯なのと、音声の力強いのと、体軀からだの立派なのに合格としたが、英語の素養のないので退学させられるということになった。

彼女の異状な勉強はそれから始まる。彼女は二つのおなじ英語の書籍を持って、一つにはすっかりと一字一字仮名をつけ、返り点をうち、鵜う呑のみの勉強をはじめた。教える方が面倒なために持てあますほどであつた。その熱心さが坪内博士を動かして、特別に別科生として止まる事が出来たのであつた。彼女は熱心と精力のあるかぎりをつくしたのでABCもよく出来なかつたのが三ヶ月ばかりのうちに、カッセル版の英文読本をもつてシェクスピアの講義を聴くことが出来た。他の生徒に負けぬように芝居に関する素養も造つておこうというので、学校の余暇には梶ますもと本清ときよしについて演芸の知識を注入した。

文芸協会の第一期公演は、第一期卒業の記念として帝国劇場で開催された。それが須磨子にも初舞台である。多くあつた女じよせい生もその時になると山川浦路うづらじと松井須磨子とだけになつていた。ハムレット劇の王妃ガートルードは浦路で、オフィリヤは須磨子であつた。

それは明治四十四年の五月のことで、新興劇団の機運はまさに旺盛おうせいの時期とて、二人の女優は期待された。

廿五歳になったおり卒業を前に控えて彼女の第二の離婚問題はおこった。自分の天分にぴったりととはまった仕事を見出すと、彼女の倨傲きようこうは頭を持上げはじめた。勝気で通してゆく彼女は氣に倣おこった。それに漸く人物の価値ねうちの分るようになった彼女は前沢との間が面白くなりだした。満されないものがはびこりはじめた。良人との衝突も度重たびかさなつて洋燈らんぶを投げつけるやら刃物三昧はものさんまいなどまでがもちあがつた。とうとう無事に納まらなくなつてしまつた。その間に彼女は卒業した。

ヒステリー気味な所作しうちは良人へばかりではなかつた。同期生の男たちが、山出やまだとか田舎娘などでも言つたら最期さいご、学校内でも火鉢が飛んだりする事は珍らしくなかつたのである。けれども氣性のしつかりしているのも群を抜いていたという。一度言出したことは先生の前でも貫こうとする。そういった氣性が女王クイーンになった芸術座でもかなり人を困らせたのだ。

彼女もまた時代が命令して送りだした一人の女性である。たまたま彼女が泰西たいせいの思想劇の女主人公となつて舞台の明星スターとなつたときに、丁度我国の思想界には婦人問題が論ぜ

られ、新しき婦人とよばれる若い女性たちの一団は、雑誌『青鞥^{せいとう}』を発行して、しきりに新機運を伝えた。すべて女性中心の渦^{うず}は捲^まき起り、生々とした力を持って振^{ふる}り立った。その時に「人形の家」のノラに異常な成功をした彼女は、驚異の眼をもつて眺められた。彼女の名はあがつた。

ある夜更^{よふ}けに冷たい線路に佇^たずみ、物思いに沈む抱月氏を見かけたというのもそのころの事であつたろう。ノラの舞台監督で指導者の抱月氏に、須磨子が熱烈な思慕^{さぶ}を捧げようとしたのもその頃のことであつた。

恋と芸術の権化^{ごんげ}——決然と自己を開放した日本婦人の第一人者——いわゆる道德を超越した尊敬に値^にいする人——『須磨子の一生』の著者はそう言っている。

彼女は猛烈に愛した。彼女はその恋愛によつて抵抗力を増した。けれど抱月氏の立場は苦しかった。總^{すべ}てのものが前生活と名をかえてしまった。家庭の動搖——文芸協会失脚——早稲田大学教職辞任——

彼女にも恩師であつた坪内先生の、畢^{ひつせい}世の事業であつた文芸協会はその動搖から解散を余儀なくされてしまった。島村氏も先生にそむいた一人になった。

嫉視^{しつし}、迫害、批難攻撃は二人の身边を取りまいた。抱月氏の払った恋愛の犠牲は非常なものだったが、寂しみに沈みやすいその心に、透間^{すきま}のないほどに熱を焚^たきつけていたのは彼女の活気であつた。そして抱月氏が生^{いき}る道は彼女を完成させなければならなかつた。かなり理解を持つているものですら、学者は世間見ずのものであるが、ああまで社会的に墮落してゆくものかとまで見られもした。貨殖^{かしよく}に忙^{せわ}しかった彼女が種々^{いろいろ}な客席へ招かれてゆくので、あらぬ噂さえ立つてそんな事まで黙許しているのかと蜚語^{ひご}されたほどである。

「緑の朝」のすぐ前に、歌舞伎座で「沈鐘^{ちんしょう}」の出されたおり楽屋のものが、

「あの人はあれで学者の傑^{えら}い先生なんですつてね、男衆^{おとこしゅう}かと思つたら」

そんなに見縊^{みくび}られても黙々と、所信の実行を示すだけであつたが、芸術座と松竹会社との提携が成立したので、これからこそ島村氏の学者としての復活だと予想されたおり忽然^{こつね}として永眠されてしまった。座員、脚本部員、事務員と、島村氏のもとに統率された芸術座もその年の暮にはまず脚本部が絶縁し、芸術座は解散し、須磨子一座ということになつてしまった。

オフィリヤで狂乱の唄^{うた}をうたい、カチューシャでさすらいの唄から、一段と世間的に須磨子の名は広まつた。行^ゆこうかもどろかオロラの下へ——という感傷^{センチメンタル}的な声は市井^{しせい}の

果^はから田舎人の訛^{だみごえ}声にまで唄われるようになった。そして最後にカルメンの悲しい唄声を残して彼女は逝^いつた。流行唄はすぐさまこんなふうに悲しい彼女の身の上を唄った——
君に離れてわしや薔薇^{ばら}の花。濡^ぬれてくだけてしおしおと、ゆうべさびしい楽屋^{いりかつら}入、鬢^は衣裳も手につかず、

幕^おの下りと待ちかねて、すすり泣くぞえ舞台裏——

彼女の葬式はすべて抱月氏^{ひつき}のにならっておこなわれた。日も時刻も何もかもみんなおなじようであつた。ただ柩^{ひつぎ}に引添う彼女が見られなくなつたばかりで、式場の光景は一層盛大で、数々の花環に取りかこまれ、名ある新旧俳優も列し、弔辞が捧げられた。けれども彼女が遺書の中に繰りかえし繰りかえして頼んでいつた抱月氏との合葬のことは問題になつた。坪内先生の説は並べて墓を建てたらというので、それには未亡人も、

「坪内先生のおっしゃる事にはそむかれない」

と許したのであつたが、かえつて彼女の親戚側の方から、

「島村氏と一緒にいたことさえ良いとは思わなかつたのだから」

と頑^{がんめい}迷なことを言出したため、彼女がとつておいた島村氏の遺髪と一所に葬ることにして、遺骨は信州へ持ちかえられた。彼女ほどに透徹した人生をおくつたものが、墓地など

の形式を氣にかけたのはおかしいが、古来の伝説や何かに美化されたものを思いだしたのもあろう。

彼女は何故死^なんだ、芸に生きなかつたかとは言いたくない。彼女には宗教もない、彼女の信仰は自分自身であつたのであろう。その本尊^{ほんぞん}が死を決したときに芸術も信仰も残らぬはずである。楠山氏への偏愛問題とかが脚本部動揺の基^{もと}になつていたようであつたが、彼女がこの後いくら生^{いき}ていて誰れに愛を求めようとも、抱月氏の高さ、尊さが、胸に響きかえってくるばかりで、決して満足のあるはずはない。かの女の死^しは当然のことである。私は彼女のことを詩のない女優^{ひと}といったが、あの女の死は立派な無音の詩、不朽な恋愛詩を伝えるであらう。ほんとに死^{しにどころ}処^こを得た幸福な人である。

松井須磨子の名は、はじめて芸名をさだめる時に、印刷物の都合でせきたてられたとき、松代^{まつしろ}から出たのだから松代須磨子としようといったら、傍から、まつしろ（真白）須磨子ときこえると茶化したので、それでは松井にしようといった。するとまた、まずい須磨子ときこえるといった。けれど「まずくつても好い」と小さな紙裂^{かみき}れへ書いて出したのが、大きな名となつて残るようになった。

とはいえ彼女はやつぱり慾張っていた。死ぬまで大芝居おおしばいを打って、見事に女優としての第一人者の名を贏得かちえていった。乏しい国の乏しい芸術の園に、紅蓮ぐれんの炎が転ころがり去ったような印象を残して――

――大正八年四月――

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1919（大正8）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松井須磨子

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>